様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３９０

研究課題名（和文）実存主義の脱領域的展開：ジャン＝ポール・サルトルとイタリア

研究課題名（英文）The transdisciplinary developement of existentialism : Jean-Paul Sartre and Italy

研究代表者
澤田　直之（澤田直）（SAWADA, Naoyuki (Nao)）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：９０２７５６６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　サルトルとイタリア知識人たちの作品、新聞雑誌の資料文献を渉猟し、1940年代から60年代までのフランス実存主義とイタリアの交流および影響関係を具体的に跡づけることができた。主な成果は、（１）1933年の最初のイタリア旅行以来の具体的な滞在の期間や場所の特定、それらが絵画論（ティントレット）や文学作品に及ぼした影響、（２）作家（ヴィットリーニ、レーヴィラ）との交流、および、それがサルトルの主宰した「現代」誌の運営などに及ぼした影響、国際的な次元での知識人会議などを支える人的ネットワークの構築、（３）イタリアの左翼思想家（アリカータ、パーチ）などとの理論、実践両面にわたる交流の実態などの解明。

研究成果の概要（英文）：　We traced the cultural exchanges between Jean-Paul Sartre and Italian intellectuals and writers in the 1950s and 1960s by analyzing the texts by Sartre and the Italian writers and philosophers as well as periodical documents of the time. Specifically, we were interested in : 1) the determination of dates and identification of places Sartre's Italian visits and their reflection in literary texts ("Tintoretto", for exemple); 2)Relationship with certain writers (E. Vittorini, C. Levi); and 3) his theoretical and practical collaboration with Italian Marxist thinkers (M. Alicata, E. Paci).

研究分野：フランス文学・思想

キーワード：　サルトル　イタリア　実存主義　ティントレット　マルクス主義　E. ヴィットリーニ　E. パーチ

１．研究開始当初の背景

20 世紀フランスを代表する作家・思想家ジャン＝ポール・サルトルを中心人物とする実存主義に関する従来の研究は、その思想変遷を追う内在的アプローチか、他の作家や哲学者との比較研究が大半であった。しかしながら、一人の思想家の誕生やある文化潮流の発展は、それを取り巻くより複雑な回路を通して形成展開されるものだとの観点からすれば、思想や文学以外の領域や、同時代の歴史・社会的文脈との関係性を視野に入れる文化史研究が不可欠である。サルトルが哲学者としてのみならず、作家、文学・美術批評家、政治参加の知識人として、従来の枠組みを超えて、領域横断的な著作活動を展開していった背景には、彼のイタリア体験が大きく関わっていたのではないか。このような仮説を出発点として、サルトルとイタリアの具体的な交流の実態と、実存主義のイタリアでの影響や発展の後を追うことにした。

２．研究の目的

本研究は、サルトルの主導したフランス実存思想がイタリアとの接触によって脱領域的な展開をしていくことになる経緯を追い、この展開の射程と意義を明らかにすることを目的とする。第二次世界大戦後、世界的に大きな影響を与えた作家・思想家ジャン＝ポール・サルトルの文学史・思想史的系譜はこれまでも丹念に研究されてきたとはいえ、もっぱらフッサールやハイデガーなどのドイツ現象学との関係によってアプローチされる傾向が強く、同時代の世界の状況、他国との関係については、包括的な研究がなされているとは言い難い。その欠落を埋めるべく、研究代表者はすでにアメリカとの関係についての考察を重ねてきた。本研究は、その成果を踏まえ、イタリアとの関係に着目し、フランス実存思想の脱領域的な展開を、サルトルの定期的なイタリア滞在およびイタリア知識人との交流を通して検討しようと試みである。50 年代 60 年代のサルトルの多面的な活動を刺激する要素の一つとして、イタリアがあったとすれば、それはどのようなあり方で可能となったのか、またどのような変容をサルトルの思想にもたらしたのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、サルトルのイタリア体験がフランス実存思想の脱領域的形成と発展にどのように関与したのかを探るために、実証研究とテクスト読解の方法を相互補完的に用いる形で行われた。つまり、一方で、事実を調査し、具体的な事象を積み重ね、他方で、それが反映されると思われるサルトルのテクストを分析するという両面的なアプローチである。精読したサルトルの文献は、⑴倫理・政治思想領域（1961 と 64 年にローマで行われた講演）、⑵文学領域（『アルブマルル女王』）、⑶美術領域（「ティントレット論」）、⑷人物評論（レヴィ論「独自・普遍」、トリアッティ追悼など）。それと同時に、サルトルと直接、間接に関わったイタリアの作家・思想家（E. ヴィトリーニ、M. アリカータ、E.パーチ）などの文献を渉猟し、それらを歴史・社会的事実文脈を参照しつつ、読み解く作業も用いた。この複合的なアプローチによって、イタリアに関するサルトルの考察と、具体的な歴史的事実がどのように連関していたのか、また同時代のイタリアの知識人との交流が、サルトルの思想発展にどのように関与したのか、また、サルトル思想が、同時代のイタリア社会にどのようなインパクトを与えたのかを明らかにすることが本研究を進める際の方法であった。

４．研究成果

1933 年夏に初めてヴェネチアを訪れて以来、サルトルはイタリアに魅了された。36 年夏にはヴェネチア、ナポリ、ローマを訪れ、第二次世界大戦後の 1946 年以降、講演および旅行で度々訪れたのみならず、53 年から晩年までは（1960 年をのぞけば）夏の休暇をサルトルはローマで過ごしたが。まずは、この極めて長期間にわたり、かつ濃密な交流の事実を多数の文献を調査し、その足跡の詳細を明らかにすることができた。サルトルのイタリア体験は、まず短編小説「デペイズマン」（1937）に始まり、『アルブマルル女王』（50 年代）「ティントレット論」といった作品へと連なっていくが、どれも生前は未刊行に終わったことが特徴である。しかし、生前は資料の多くが公刊されなかったために、研究は立ち後れており、日本では包括的な研究は存在しない。今回の研究の最大の成果は、時系列に沿って、交流を追いつつ、それがサルトル及び実存主義の展開にどのように寄与したのかを詳らかにできたことと言えよう。

以下、主な成果を項目別にまとめる。

⑴サルトルのイタリア滞在の具体的な場所と日付を、伴侶シモーヌ・ド・ボーヴォワールの回想録からだけでなく、多くの関係者の証言や新聞雑誌資料などを渉猟することで、かなり詳細に調査し、裏付けるとともに、同時期に起こったイタリア内外の事件などもそこに織り込むことで、サルトルのイタリア文化との関係を歴史的文脈のうちで確認することができた。また、サルトルが訪れた場所、美術館などについても確認が取れ、それらが作品にどのように反映することになるかについてもまとめた。とりわけ、ティントレット論に関して、その起源と展開、中断、最終的な放棄への流れを、内在的にだけでなく、当時の状況との関わりで追跡することができた。

⑵1940 年代から 60 年代までのサルトルとイタリア知識人との具体的な関係を、サルトル自身のテクストだけでなく、イタリア知識人たちのテクストを参照することで、具体的に

検討した。まずは 1945 年の『現代』誌発刊当時から始まった『ポリテクニコ』誌を主宰するE.ヴィトリーニとの交流からは、戦勝国フランスと敗戦国イタリアという違いを超えて、知識人たちが同じ目標に向かって共闘する過程が露わになった。と同時に、彼らの立ち位置が、政治的次元でも文化政策においても共産党の考えと対立していくことも明らかになった。革新的芸術や文化を警戒する保守的な中流層を取り込むことを考えていたイタリア共産党の指導者トリアッティによって激しく非難されたが、ヴィットリーニはあくまで政治に対する文化の優位を主張し、知識人は政治家に追随すべきではないという立場を貫き、最終的には共産党と訣別、49 年に共産党を離党することになる。このようなヴィットリーニのスタンスはサルトルと共通する部分が多い。

一方、カルロ・レーヴィとの交友からは、国際的な次元での知識人会議、とりわけ東西作家会議などを支える人的ネットワークの構築のみならず、サルトル後期の主要概念である「独自普遍」が、イタリア文化との交流を通じて育まれていく経緯が垣間見られた。そのほか、モラヴィアなどの有名作家とサルトルとの交流に関しても、双方の発言や、周囲の証言を合わせて立体的に検証できた。

⑶イタリア思想家たちとの交流では、イタリア共産党系の知識人との関係の重要性が確認された。フランス共産党は、実存主義に対して、極めて冷淡かつ批 判的だったが、イタリア共産党の指導者パルミーロ・トリアッティをはじめ、チェーザレ・ルポリーニ、マリオ・アリカータなどは、サルトルの実存主義をマルクス主義と両立するものとして評価し、サルトルを二度ローマに招き、討論会を行うなどと、対話が盛んに行われた。61 年の講演は『主体性とは何か』として死後出版されたが、この著作を翻訳する作業の際に、その周辺のテクストを読解することで、交流と相互影響の実態がより具体的に明らかになった。とりわけ、哲学者エンツォ・パーチとの関係の重要性が判明し、相互の思想の発展に、人的交流が大いに寄与していたことを明らかにできた。その詳細は『主体性とは何か』の訳者解説及び、「サルトルとイタリア⑵」において詳細に検証提示したが、長期にわたるイタリア左翼知識人との交流のみならず、精神科医フランコ・バザリアへの影響も発見でき、サルトルの思想が、イタリアの精神医学に多大な影響を与えた可能性などについても展望を開くことができた。

⑷当初の目的ではなかったが、研究を推進する過程で、サルトル以外の同時代のフランス作家（M.デュラスなど）のイタリア交流に関しても、新たな発見があり、これらの成果は学会発表や個別論文のみならず、サルトルそのものが主題ではない研究発表にも織り込んで、その幅や奥行きを広げることに寄与している。

以上の成果は、今後さらにサルトルと第三世界の関わりを研究する際の基盤となるとともに、汎ヨーロッパ的規模での 20 世紀後半の文化・精神史の研究に寄与するものがあると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①澤田直「サルトルとイタリア(2)」『立教大学フランス文学』47 号 63-91 (2018) 査読有

②澤田直「マルグリット・デュラスと地中海廃墟を透視すること」『立教大学フランス文学』46 号 85-109 (2017) 査読有

③澤田直「ジャン＝リュック・ナンシー―ハイデガーとの終わりなき対話―」『Heidegger-Forum』 第 11 号 104-115.(2017) 査読有

④澤田直「サルトルとイタリア(1)」『立教大学フランス文学』45 号 69-82 (2016) 査読有

⑤Nao Sawada, « Comment vivre ensemble ? Barthes et Sartre :communauté et rythmes », *Littera, Revue de Langue et Littérature Françaises* 20-30 (2016) 査読有

⑥澤田直「九鬼周造とフランス---『「いき」の構造』とその周辺をめぐって」『現代思想』44 巻 23 号 213-229 (2016)査読無、依頼有

⑦澤田直「信と知の間で」『ふらんす』特別編集号 59-61 (2015) 査読無、依頼有

〔学会発表〕（計 11 件）

①澤田直「バロックの渦としてのカリブ的思考」国際コロック「世界文学から見たフランス語圏カリブ海 ネグリチュードから群島的思考へ」(2018)

②澤田直「カタストロフィを越えて ── 文学・芸術をめぐる倫理の射程:イメージによって」日本フランス語フランス文学会関東支部(2018)

③ Nao Sawada, « Edouard Glissant, ou l'esthétique antillaise », Conseil International Etudes Francophones（2017）

④ Nao Sawada, « L'honneur et le plaisir de traduire Philippe Forest : Au-delà de l'exotisme », Philippe Forest : Une vie à écrire (2016)

⑤Nao Sawada, « Sartre et l'Italie : autour du biographique » 国際シンポジウム「サルトルの今日性」(2016)

⑥澤田直「ジャン＝ポール・サルトル 評伝というトポスの可能性---未完のティントレット」日本フランス語フランス文学会(2016)

⑦Nao Sawada, « La figure de la dormeuse chez Marguerite Duras », l'équipe de recherche "Philosophie, arts et littérature" l'Université Paris 8, (2015)

⑧ Nao Sawada, « La question de genre en philosophie : Sartre et la sexualité », Séminaire à l'ENS (2015)

⑨ Nao Sawada, « L'engagement et le

désengagement en temps de catastrophe », Colloque 2015 de la Société d'Etudes Franco-Coréennes (2015)
⑩Nao Sawada, « Comment vivre ensemble ? Barthes et Sartre : communauté et rythmes », Roland Barthes, l'écriture et la vie (2015)
⑪澤田直「シャルリー・エブド事件と表現の自由」、総合社会科学会（2015）

〔図書〕（計 11 件）
① Catherine Mayaux, Nao Sawada, et al., *Philippe Forest, une vie à écrire*, Gallimard (2018) 341p. 275-283
②福島清紀, 澤田直著『寛容とは何か』工作舎(2018) 389p. 354-374
③加賀野井秀一ほか監、澤田直ほか著『メルロ=ポンティ哲学者事典 別巻』白水社(2017) 507p. 188-189, 230-231, 442-46
④澤田直編著『異貌のパリ 1919-1939 シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化』水声社 (2017) 275p.
⑤岩野卓司編、澤田直ほか著『共にあることの哲学と現実 家族・社会・文学・政治』書誌心水(2017) 317p. 87-111
⑥フィリップ・フォレスト『シュレーディンガーの猫を追って』澤田直・小黒昌文訳、河出書房新社 (2017) 317p.
⑦齋藤元紀、澤田直、渡名喜庸哲、西山雄二編著『終わりなきデリダ ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』法政大学出版局 (2016) 372p.
⑧岩野卓司編、澤田直ほか著『共にあることの哲学』書誌心水 (2016) 284p. 19-51
⑨齋藤元紀編、澤田直ほか著「戦争と戦争のあいだ」『連続講義 現代日本の四つの危機哲学からの挑戦』）講談社選書メチエ(2015) 343p. 257-283
⑩サルトル『主体性とは何か』（澤田直・水野浩二訳）白水社 (2015) 222p.
⑪Noriko Taguchi (ed.), Nao Sawada et al., *Comment la fiction fait histoire : Emprunts, échanges, croisements*, Champion, (2015) 351p. 239-250

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田 直之(澤田直)（SAWADA, Naoyuki (Nao)）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：９０２７５６６０